

6 ポンペの病理学総論オランダ語講義 ノートの研究

相川忠臣・ハルム²⁾ ボイケルス

¹⁾長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

・医学部生理学第一

²⁾ライデン大学医学部医史学教室

ポンペ・ファン・メールデルフォールトの病理学総論オランダ語講義ノートは松江赤十字病院にあったもので、ポンペの手によるものではなく日本人の弟子が筆写したものである。その内容は長崎医科大学貴重図書 No.114 の朋百氏（ポンペ）講述の原病総論とよく一致し、ポンペのオランダ講義ノートを翻訳したものであろう。Julius Budge 著の蘭訳 *Algemene Pathologie Gergond op Physiologie* (1846) とポンペの病理学総論オランダ語講義ノートとはその内容が良い一致を示した。しかしノートの内容は *Algemene Ziektekunde* で始まり、原典の順序どおりに各章を簡略に要約した

ものであった。

ポンペはブートケの著書を愛読していたのであろうか、「ブッチー曰く」としてポンペの講義録に散見される。同じく松江にあったポンペの生理学オランダ語講義ノートは F.C.Donders と A.F.Bauduin 著の *Handleiding tot de Natuurkunde van den Gezonden Mensch* が原典であるが、生殖の項のみは Prof. Julius Budge's *Kort Begrip der Bijzondere Natuurkunde van den Mensch* の *Eerste Boek* の三から四五ページの内容を要約したものであった。ドンデルスとボードインの教科書は、神経生理学と生殖を含んでいない。このためにポンペは生殖の項をブートケの生理学教科書で補い、解剖学で神経解剖学をかなり詳細に講義した。しかし新興の神経生理学を講義しなかったと思われる。しかし生理学に造詣の深いブートケによる生理学に基づいて書かれた病理総論（オランダ語の書名参照）を選択したので、原病総論の序論で神経について多くのことが書かれている。体中各部交感、コンタク トシンパシー、レフレクシー、神経両体平均を為すと

反対を為すの事件、神経系統などである。病徴論の中でも、運動の病や覚知、感觸、意志之疾患で神経について書かれている。しかし神経の電気刺激で自律神経や体性運動神経の役割が明確になったのは一八五〇年代である。一八五七年來日のポンペはそのような新知見を教えることはできなかった。ただ心臓神経の電気刺激にふれているので一八四六年のウエーバー兄弟による心臓神経の電気刺激については不完全ながら知識があったのであろう。ポンペの跡を継いだボードインは一八六二年に來日、生理学の講義で、電気生理による新知見を盛り込んだ神経生理学と生殖を教えた。迷走神経の電気刺激により心拍数を減少し、交感神経により心拍数が増加して、迷走神経と交感神経は全く反対の運営を為すと述べている。一八七〇年、ボードインは東京大学医学部の前身である大学東校に招聘されて神経生理学の講義を教え、日講紀聞として出版された。その内容は長崎での講義より整然としている。島村鼎甫は日講紀聞の序文で「殊に神経論の如きは漸く近今に至りて愈其精確を得る所なれば未だ之を専らに

講ずる人鮮なし、故に（抱氏）に今委嘱して神経及飲食の二編を講じ」とボードインの神経生理学の講義の意義を述べている。

原病総論の後半は現在の衛生学に近い内容である。「外因の失常の病原となるを論ず」ではさまざまな飲食物、氣候、光線の影響について述べ、「体中機運の変じて病因たるものを論ず」では労働、伝來病、年齢、小児成人、男女と病について述べている。産業と病籍、居所によるなどの項もある。